

2026年度入学試験 国語 第2回

問題		得点率 (%)	問題		得点率 (%)
①	問一	52.8%	②	問一	39.4%
	問二	49.3%		問二	51.8%
	問三	27.1%		問三	82.5%
	問四	62.9%		問四	56.7%
	問五	9.0%		問五	20.4%
	問六	42.3%		問六	26.9%
	問七 A	94.2%		問七 A	87.4%
	B	94.8%		B	95.4%
	C	91.4%		C	88.0%
	D	96.0%		D	30.4%
	問八 ア	62.3%		問五 I	94.2%
	イ	85.9%		II	74.5%
	ウ	42.6%		III	77.6%
	エ	71.2%		IV	44.8%
オ	84.4%	V	76.4%		
問九	35.0%	問九	35.6%		

合格者最高点 76

合格者最低点 34

① 出典： 出典：港千尋「風景と時間 リサーチからレガシーへ」『災害とアートを探る』所収

問一 選択問題です。「災害とアート」がどのように共通して古代に「根」つまり由来をもっているのか、どのように共通して「今日的なテーマ」であるといえるのかを「この」という指示語をもとに考える問題です。「この点」が指している、傍線部(1)より前の内容を根拠に考えます。正解はエです。アは「変化の象徴である災害と芸術」、イは「古代に起きた災害へのうらみも忘れてはならない」、ウは「災害の記録と記録としての芸術は注目すべきものである」が誤りです。アと答えた誤答が多くみられました。

問二 3行記述問題です。傍線部(2)の「その」という指示語の内容を考えます。傍線部(2)の直前に「これを常識とするなら」とあり、さらに「これ」の内容を考える必要があります。「これ」が指すのは1つ前の段落であり、「常識」の前提が述べられています。この段落を要約的にまとめていくと正解です。解答のポイントはおおむね抑えられていましたが、それを要約するにあたって筆者の主張と、それを述べるために用意された具体例とを分け、前者を中心にまとめることが必要になるのですが、答案には具体例を羅列したものが多くみられました。

問三 3行記述問題です。芸術と自然、力、秩序、無秩序の関係を説明しますので、この5つの語がすべて解答に入っている必要があります。答えの根拠は傍線部(3)の後ろの段落で、人間が作ってきた秩序を災害で破壊して無秩序（カオス、渾沌）にしてしまう力が自然にはあるとあります。しかし、その無秩序のなかにべつの秩序を見出すのが人間の力であり、アート＝芸術にはその力があると書かれています。これらをまとめて記述すれば正解です。答案の中にはすべての要素を比較できていないものが目立ち、部分点になったものが多くありました。

問四 選択問題です。筆者がネガティブ・ハンドの写真を被災地に送った理由について、傍線部(4)の後に「創造性や共同性を早期させるイメージ」であるという点を挙げていますが、さらに「それを選んだもうひとつの理由は時間にあった。」と続いています。時間についてはその1つ後の段落に述べられています。ので、ここを根拠にして答えを選びます。正解はイです。アは「その力（ものやアイデアを生み出す力や人々が協力していく力）には時間制限がある」、ウは「放射能汚染が収束することへのエールになると考えた」、エは「筆者が災害と芸術の関係を論じるにあたって考慮すべき時代のものであったから」（災害と芸術について論じることとネガティブ・ハンドの写真をエールとして送ったことに因果関係はない）が誤りです。

問五 3行記述問題です。【資料】を本文理解の助けにして、傍線部(5)の和歌に筆者が見出している意味を考えます。和歌は、ネガティブ・ハンドと同様に「ふつうの感覚では理解できないような時間の単位」を超えたものとして紹介されています。1000年も前の記憶が今も残っていることについて本文では「もしそれが古文書の記録だけだったなら、はたしていい伝えられたらどうか。恋の歌のなかにとりこまれ、芸術の一部となったから、一〇〇〇年の時を越えて伝えられたとはいえないだろうか。」とあります。そして【資料】には「『君をおきて…』の歌以来、「末の松山」は恋歌に、浮気心を持つかどうかという意味で読まれるようになる。」とあり、「末の松山」が和歌という芸術の一部となっているといえます。以上の内容をまとめると正解です。和歌の意味を理解できなかったからか正答率が低くなってしまいました。

問六 脱文補充問題です。脱文には「その目的が理解できないからである」とあります。目的が理解できないことが理由として続くような部分に入るはずですので、「今日でも意味はあきらかになっていない。」の直後にある「え」が正解です。

問七 接続語問題です。選択肢の4つの語が必ず1つずつ対応します。Aには、人間に予兆を読み取る能力を要求するとともに、占いや予言の技術を発達させたことに関して前後で同類

の事柄を並べるウ＝「あるいは」が入ります。Bは、災害との対比をあらわすエ＝「いっぽう」が入ります。Cには、オーリニャック期に関して補足の情報を説明するため、ア＝「ちなみに」が入ります。Dは、前の内容を抽象化してまとめているので、イ＝「つまり」が入ります。

問八 漢字問題です。ア「再考」、イ「天変」、ウ「全容」、エ「起源」、オ「収」です。楷書で丁寧を書く練習を日頃からしておきましょう。この中ではウの正解率が低かったです。

問九 内容正誤問題です。正解はアです。イは「芸術家本人にしか予感できない」、ウは「社会情勢が不安定な時に現れやすいので、災害と芸術の関係を考えるにあたって重要なヒントを与えてくれる」、エは「マドレーヌ期は三万四〇〇〇年前の時代」が誤りです。誤答ではウがもっとも多くありました。

2 出典：夏川草介『スピノザの診療室』

問一 3行記述問題です。登場人物二人の心情を書き分けて説明します。哲郎は花垣が大学病院の医師を哲郎のもとに派遣するから指導してほしいという依頼を聞いて、「勘弁してください。私が教えられることなんて何にもありません」と言って困惑しています。対して花垣は哲郎の「内視鏡を実際に見てきた」経験からその技術の高さを評価しており、医局の医師たちを派遣することの意義を確信しているのです。二人の心情を対比する形式になっていないものが散見されました。指示をよく把握する必要があります。

問二 選択問題です。設問にある通り哲郎と花垣は同じ医師でありながら、職場の環境が全く違うのです。その違いを適切に説明したものを選びます。まず、花垣の努める大学は「成功すれば賞賛と脚光を浴びて栄光の道が開けるが、失敗すれば、たちまち非難と批判にさらされ」（50行目）る過酷な環境です。対して哲郎の勤める終末期医療の病院は「答えのない場所で死と向き合う。一言で言えば混沌としている」（53行目）現場です。このことを言い当てているのはウです。イとエと答えた誤答が多くみられました。

問三 選択問題です。雑誌編集者の葛城は「風景の一部にでもなってしまったかのように存在感を消し、必要な時だけは表に出てきてはまた遠ざかる」（57行目）存在であるといいます。つまり、自分の主張を面に出さず、周囲の発言を静かに聞き取っていく能力の持ち主ということなので、ここは「熟練の聞き手」がふさわしいです。よって正解はイです。

問四 選択問題です。哲郎が甥の龍之介にいう「立派な医師」よりも「立派な大人」になれということばの意味は、66行目から始まる哲郎の発言の中で説明されています。医師は目の前の人を救うことはできても、温暖化や世界平和を実現することはできないと言っています。つま

り、医師だけではなく、他の分野にも目を向けてほしいというのが哲郎の真意と考えられます。アは医師と科学者、政治家を比較して後者の方がよいと述べている点で「立派な大人」の説明としては不十分です。イも同様に「人の役に立つ」点で後者がすぐれていると述べている点で不十分です。ウは「医師」と「政治家、科学者」を並列で述べており、「立派な大人になるとはどういうことかを学んでいく」というのも不十分です。正解はエで医師の重要性を認めつつも、そのほかの職業でも人の役に立てることを知ってほしいという哲郎の願いです。イとウと答えた誤答が多数ありました。

問五 4行記述問題です。哲郎が龍之介に対して、日本の政治家のイメージが悪いのは、それを報じるマスメディアの問題だと言ってしまったあと、その場にメディア側の人物である哲郎がいたことを思い出して気まづくなっているのです。解答の方法としては、まずマスメディアが政治家に対して悪いイメージを国民が持つのはその報道の仕方や、品性の問題だと哲郎が考えていることを述べます。そして、その考えを発言したその場所に編集者の葛城がいたことを思い出し、決まりが悪く、居心地がよくない思いになっていることを説明します。葛城の立場がどのようなものであるかを把握することが難しかったようです。

問六 4行記述問題です。編集者の葛城が、花垣から哲郎のデスクにスピノザの本が置いてあったことを聞いて述べた言葉です。スピノザが歴史に残る大著を残しながら、生前は哲学の表舞台には出てこなかったのに、職人技を要するレンズ磨きの腕が高かったことを比喻として、哲郎の現在の行いを表現します。すなわち、哲郎が注目を浴びる医療の最先端の現場にはいないのに、終末期医療の現場では患者のために全力で働いていることを述べているわけです。そこで、解答の前半でスピノザのことを述べ、「そのように」哲郎も日々の医療で確実に自分の仕事をしていることを述べます。

問七 オノマトペに関する問題です。文脈に沿ってそれが掛かる言葉がどのように使われているのかを考えていきます。Aは龍之介が、哲郎がかつて務めていた大学病院を辞めたいきさつを花垣と話しているのを聞き、その内容を緊張して身を固くして聞いているさまですから「じっと」がよく、Bは花垣が哲郎に対してからかいの気持ちも含まれた非難の言葉であるマイペースな保護者から自分が龍之介を確実に指導したいという発言のなかにあるので「しっかり」がよく、Cは主語である葛城はこの登場人物たちのなかでは第三者的な立場にあり、かつ問三でみたように落ち着いた人柄であり、「鷹揚に答え」た発言とともに行われた行動なので「ゆっくりと」がよく、Dは淡泊な味付けなのに素材の風味が気をひくとあるので「はっと」がよいです。Dは「淡泊」につられて「あっさりと」を選んだものが多くありました。

問八 慣用表現に関する問題です。Ⅰは「相づちを**打つ**」、Ⅱは「器」もしくは「うつわ」、Ⅲは「機知に**富む**」、Ⅳは「**世辞**」、Ⅴは「**的を射る**」です。

問九 本文に合うものを探す問題です。アは哲郎のワークライフバランスの調整という退職理由を飛良泉が「世代的にそれが理解できない」という記述は本文中にはありません。イは患者の死亡が伝えられたのは「デザートフルーツを添えたアイスクリームが出てきたところ」(115行目)なので間違いです。ウは花垣が龍之介の保護者になっていることを「呆れて軽蔑している」わけではないので間違いです。エは問題文の最後の部分の内容であり、問六で考えた内容でもあります。これが正解です。誤答ではイが多くみられました。